



私にとっての読書とは

寺田匡臣

大学に進学してからというもの私のことを知識があるという人が多くなってきて、少しばかり驚きを隠せなくなって来たので、この図書館報のページを借りて私にとっての有益な読書の仕方をお伝えできればと思い、一筆書かせていただきました。

あなたにとって読書とは何ですか。私にとって読書とは楽習です。読んで字のごとく私にとっての自分の知りたいことからそうでないことのすべてを楽しみながら学ぶことです。書籍としてこの世の中に出版されるすべての本にはその内容如何に関わらず作者の意図が存在します。それを読み解き、あなた自身がどのような感想を抱き、なぜそう思うのかを深く考察することが大切であるからです。

例えば、皆さんもよく知っていらっしゃるイギリスのファンタジー作品であるJ・K・ローリングの『ハリーポッター』及び『ファンタスティック・ビースト』には共通して「愛」というテーマがあります。親子の愛、思い人や動物に対する愛など様々な形で表現されています。しかし、先に述べた作品に描かれている愛は単なる1側面でしかありません。同じくイギリスのファンタジー作品であるダレン・シャンの『デモナータ』シリーズでは子を失った母親の子どもに対する愛の深さから子供の形をした魔物に食べられるという場面があり、愛には狂気すら感じさせる側面も持ち合わせていることが理解できることでしょう。他にも、フランスの作家アベ・プレヴォーの『マノン・レスコー』を読めば、デ・グリユーのマノンに対する身を焦がすように破滅的で純粋な愛情・恋情というものがどういうものであるかすぐにわかるだろう。日本の作品でも、7月に公開されていた新海誠氏の映画である『天気の子』でもヒロインの女の子を助けに行くために主人公は警察署の尋問

室から逃げ出し、登場人物たちの力を借りつつもひたすらに走り続けます。このような誰しもが無謀だと思ふような行動にさえ出してしまう蛮勇さもまた愛の1側面であるということができると私は思います。

ここまでひたすら作品に込められた「愛」というテーマについて書いてきましたが、ただ読むでも理解することができるでしょう。問題はこれらの作品を読んであなた自身がどう感じて、どのように考えるかなのです。愛や恋のためだけに人生や命を投げ出すことを馬鹿馬鹿しいと鼻で笑うもよし、涙を流しながら拍手を送るもよしです。ただどうしてそこでそのような感情が沸き立ってきたのかについて目を向けてみてください。あらためて考えてみると先ほどまでの考えと違う思想がでてきたり、案外間違っていないなと思うことがたくさん出てくるはずですが、そうしていくうちに何事に関してもあなた自身の考えを発言していくことができるでしょうし、読んだ書籍が増えれば増えるほど発言の重みや力強さは増していくことでしょう。これだけと思われる方は少なくないはずですが、これだけです。意識してしてみれば案外と簡単なことなのでぜひともやってみることをお勧めします。もし誰かの考え方に良い影響を与えることができたなら光栄に思います。

最後に、本稿に名前を挙げた文学作品に関しては『天気の子』を除きすべて本学図書館に所蔵されています。他にも大変興味深い作品も多く所蔵されていますので、もしこのページを読んで興味が湧いてきたという方はぜひともご利用ください。ここまで読んでくださった読者の方、このページの掲載に関わった皆様に深く感謝いたします。ありがとうございました。

てらだ ただみ (フランス語学科4年次生)